

# 2024 年 聖週間のミサ説教

(受難の主日・聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭・主の復活日中)

(2024 年 3 月 24 日に完成するのでそれまでお待ちください)

## 受難の主日 (マルコ 15:1-39)

御父がすべてを御子に委ねられた (1)



「だれが何を取るかをくじ引きで決め(た)」(15・24) 兵士たちは争ってイエスの衣服の取り合いをしています。イエスそのものには目もくれず、衣服に群がっています。中田神父はマグダラのマリアが、イエスのご遺体を引き取りたいと言ったのを思い出しました。

「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」(ヨハネ 20・25) 兵士はイエスその方には興味がありませんが、マグダラのマリアはイエスのほかには興味がありませんでした。

今年の聖週間は、「御父がすべてを御子に委ねられた。」このことを一週間黙想したいと思っています。御父がすべてを御子に委ねられた。その中に、私たちも含まれています。私たちは御子に委ねられた人間であり、聖なる一週間、私たちも自分自身を御子に委ねるのです。

イエスはすべてを奪われました。兵士から衣服を奪われ、群衆ののしりや祭司長律法学者たちの侮辱。人としての尊厳も働きの実りも否定されました。棄てられて、権威も地に落ちて、何もかも奪われた姿で、その最期を御父に委ねます。

しかし、御父と御子の間では何も失われず、すべてが保たれていました。その場にいる人々、この典礼にあずかる私たちさえも、何も失われていないとなぜ言えるのか理解できていません。その答えは聖木曜日の朗読の中にあります。聖木曜日、夜7時に予定されている典礼に皆さんが参加して、聖木曜日のミサを完成させてくれる。その時に答えが与えられるでしょう。

衣服は奪われ、人としての尊厳も働きの結果も否定され、御子を受け取ろうとする御父には何が残されたのでしょうか。残されたのは、私たちを十字架の一つとして担って救ってくださった御子そのものです。衣服を着ているかどうかではなく、その御生涯のすべてで人々の悲しみや苦しみを担った御子イエスが、御父の受け取り分、御父にとってのすべてなのです。

御父が受け取ろうとする御子の姿をもう一度眺めましょう。十字架に付けられています。人々の嘲笑の的になっています。「わたしに従いなさい」とイエスは招いています。「主よあなたに従いますが、私が身につけている物、今まで築いてきたものまで剥ぎ取らないでください」そう言いながら従おうとするのでしょうか。

聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭に参加すれば、きっと「これは身につけたままにしてください」「これは剥ぎ取らないでください」そんな気持ちも横に置けるようになるでしょう。「イエス・キリストが私に残されていればそれで十分です」ときっぱり言えるキリスト者になれるよう、聖なる三日間を可能な限り参加することにしましょう。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)

主日の福音 2024/3/28(No.1287)

## 聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

父がすべてを御自分の手にゆだねられた (2)



「イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。」 (13・3-4) 受難の主日に予告した、御父とイエスの間では失われる物は何も無いことへの答えです。

御父が、すべてを御子イエスの手に委ねました。御父が、造られたものすべて、人類のすべてを委ねられたので、命を奪おうとする人々が何をしようと、何も奪われることはないのです。その、すべてを委ねられたイエスは、最後の晩餐の席で、今度は弟子たちにすべてを委ねようとするのです。

聖木曜日は、司祭職の制定と、聖体の秘跡を定められたことを記念する日です。司祭職の務めは、イエスが弟子たちの足を洗う場面に象徴的に示されています。それは、人の上に立つことではなく、互いに仕え合うということです。「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」 (13・15)

司祭はミサをささげます。イエス様が命のパンとなって、人々に配られ、人々が養われる。その奉仕をするのが司祭です。決して、「配ってやっている」という役割ではありません。ゆるしの秘跡では罪をゆるします。「あなたの罪はゆるされましたよ」と、イエスの働きを届けるのが務めです。その徹底した奉仕の姿が、弟子の足を洗う姿です。

今日の典礼に、私たちは一人ひとり、父なる神から呼ばれて御子イエスに委ねられました。喜んできた人も、そうでない人も、呼び集められて、すべてを委ねられたのです。どなたか、洗足式にお願いされた人がいるでしょう。そのほかにも、洗足式に加わりたい方はこの説教のあとどうぞ前に来てください。

「わたしの足など、決して洗わないでください」 (13・8) とペトロは言ったのです。決して洗わないでくださいと思う人でもけっこうです。イエスのお手本に倣って、司祭があなたにお仕えます。

今日の典礼は、イエスが、儀式の形を取って弟子たちにすべてを与え尽くす日です。明日の受難の典礼は、イエスが全身を使って弟子たちにすべてを与え尽くす日です。いずれにしても、御子イエスは御父からすべてを委ねられ、そのすべてを弟子たちに託そうとします。

敵が、外からどんな攻撃をしても、何も奪われることはありません。何も失う物はありません。ですから私たちも、奉仕の模範を示してください。イエスにすべてを委ねましょう。イエスにすべてを委ねるなら、私たちは何も奪われる心配が無いのですから。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

主日の福音 2024/3/29(No.1288)

## 聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

父がすべてを御自分の手にゆだねられた (3)



「だれを捜しているのか」(18・4) イエスがご自身をなげうって救いを成し遂げられるいよいよの場面で、最初に語られたのがこの言葉です。一隊の兵士と、祭司長やファリサイ派が遣わした下役たち、そしてイスカリオテのユダもそこにいました。

彼らは「ナザレのイエスだ」(18・5)と答えます。彼らは、だれを捜しているのか、本当に分かっていたのでしょうか。「どこのだれか」は分かっていたでしょう。ただ、イエスの呼びかけにちゃんと答えてはいないのです。

イエスは「救い主」なのですから、「救い主を捜している」と言うべきでしょう。「だれを捜しているのか」と問われて「救い主を捜している」とちゃんと答えるのであれば、そもそもイエスに手を掛けたりはしないでしょう。

ではここに集まった皆さんはどのように答えるのでしょうか。「だれを捜しているのか」昨晚のミサで考えたように、イエスは御父から御自分の手にすべてを委ねられた救い主です。「御父からすべてを委ねられたあなたを捜しています。それなのに、あなたが十字架にはりつけになる罪を担わせたのは私です。」そうとしか答えることができません。

人を憎んだり、悪く思ったり、腹を立てたり、嘘を言ったりごまかしたりした。それらを担って、イエスは十字架にはりつけになりました。そうでありながら私たちはどこまで十字架のイエスに近づくことができるのでしょうか。イエスはその答えを示してくださいました。

「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出した。」(19・34) イエスは私たちすべてのために、裂け目を用意してくださいました。裂けたところから、私たちはイエスの最も奥深くに導かれます。イエスの御心は、私たちのために開かれています。胸に手を当てても、イエスのみ心に触れる資格はありませんが、イエス自らが、「わたしはあなたを救うためにこの傷を受けた。わたしに近づきなさい」と言ってくださいます。

最後の晩餐で、御自分を聖体として与えてくださるイエスは、十字架上では流されたその血の一滴までも与えてくださいました。与え尽くしたのは、御自分を無にして私たちが留まる場所を用意するためかもしれません。

私たちはこれから、イエスの復活のその時を待ちます。私たちにすべてを与え尽くし、私たちのすべてを受け取った方は、栄光をお受けになります。イエスは「受け取ってください」と言えるものを持たない私を受け取って、救ってくださいました。ただひたすら感謝して、今日の典礼を進めていくことにしましょう。

復活徹夜祭(マルコ 16:1-7)

主日の福音 2024/3/30(No.1289)

## 復活徹夜祭 (マルコ 16:1-7)

父がすべてを御自分の手にゆだねられた (4)



皆さん主の復活おめでとうございます。今年の聖週間、遠ざかっていたことが復活しました。聖木曜日の洗足式です。長くお休みしていたので、ここにお集まりの皆さんの中に、足を洗ってもらった人は数えるほどしかいなくなっているかもしれません。

これは一つのしるしです。「長くお休みしていた」にも関わらず、復活することができるのです。それは儀式に限りません。私たち自身も、長くお休みしていた人がこの中に混じっているかもしれません。イエスの復活によって、その人も復活するのです。三年お休みした人がいるかもしれません。八年お休みした人がいるかもしれません。それでも、イエスが復活したおかげで復活の恵みにあずかるのです。

イエスの復活こそ、私たちが復活できるただ一つの理由です。実は私自身も、すっかりお休みしていた「体を動かす習慣」を復活させることができました。六方の浜まで歩くのが今は習慣になっていますが、それは復活したイエスが、いつも一緒に歩いてくださって「あなたはまだやるべき事がある」と励ましてくださったからできたのです。

イエスはどんな人を、復活の勝利によって復活させることができるのでしょうか。教会から離れていることに負い目を感じている正直な人だけを復活させることができるのでしょうか。イエスの復活の勝利は、すべての人を、新しい人に復活させることができると私は信じています。

与えられた朗読の登場人物は、いくつかなの人々の種類を表していると思います。イエスに油を塗りに行くために墓に向かう婦人たちは、イエスの復活を理解していなかった人々です。ご遺体に敬意を表すことしか考えていませんでした。しかし彼女たちは、弟子たちに復活の事実を知らせる証言者に生まれ変わらせていただきました。復活したのです。

弟子たちは、イエスが前もって復活について教えていたのに信じることができなかつた人々です。イエスから一時的に遠ざかって、負い目を感じていた人です。イエスの復活を理解していない人から、理解していても信じられず遠ざかっていた人まで、イエスはすっかり新しい人にしてくださるのです。復活させてくださるのです。

聖木曜日に示した一つのことがここにも生きています。「父がすべてを御自分の手にゆだねられた」(ヨハネ 13・3)。イエスにすべてがゆだねられていたので、復活の勝利の時にすべての人を御自分のもとに引き寄せ、新しい人に変えてくださる、復活させてくださるのです。イエスは復活して、私を含むすべての人を引き寄せてくださったのです。

イエスは先に復活なさって私たちを招いてくださっています。何を畏れるのでしょうか。何をためらうのでしょうか。「私が今あるのは、復活したイエスのおかげです」「私が今ここに集められたのは、復活したイエスのおかげです」と、声に出しましょう。イエスはいつも先に、私たちが出会うはずの場所に来て、待っておられます。

復活の主日 (日中) (ヨハネ 20:1-9)

## 復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

父がすべてを御自分の手にゆだねられた（5）



あらためて主の復活、おめでとうございます。聖週間の典礼もこれで完了となりますが、何年、いや何十年打ち合わせを積み重ねても、打ち合わせ通りに行かなかつたり、打ち合わせ以外のこと起こつたりします。聖週間の典礼に慣れはない。そういうことなのでしょう。

復活の主日・日中の朗読は、徹夜祭の朗読より少ない材料でイエスの復活にたどり着く必要があります。徹夜祭では「あの方は復活なさって、ここにはおられない」（マルコ 16・6）と知らせる若者が登場します。しかし日中の朗読には、復活したことを知らせる人は現れません。

さらに、徹夜祭の朗読では親切に告げるべき内容まで教えてもらっています。「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」（同 16・7）

しかし日中の朗読では都合の悪いことにマグダラのマリアが感じたままを告げています。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」（ヨハネ 20・2）徹夜祭の朗読と比べると、圧倒的に乏しい材料です。

それなのに、ペトロと、イエスが愛しておられたもう一人の弟子は、墓へ走って行きました。乏しい材料だったから、二人は墓へ行くことになったのかもしれませんが。私はここにも、御父がすべてを御子に委ねられたことが生きていると感じました。

つまりこうです。マグダラのマリアが報告したのは内容の乏しい情報でした。イエスはそれを最大限活用されたのです。乏しい情報しか伝えられない人であっても、その人は御父から御子に委ねられた人であり、イエスの手にかかれば乏しい情報で二人の弟子を動かすのです。

ペトロと、もう一人の弟子も、墓に向かったときは「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」（同 20・9）という聖書の言葉を、まだ理解していませんでした。理解していたなら、墓に行かずとも「あの方は復活なさったのだ」とその場で喜んだことでしょう。理解していなかった二人も、イエスの手にかかれば走って墓に向かう人、行動する人に変えてもらうのです。

イエスは今や、復活してすべての人の希望となりました。御父は御子イエスにすべてを委ねられました。私たちも御子イエスに委ねられた人です。イエスに委ねられているということは、イエスの手にかかれば、不十分な状態にあっても素晴らしい体験を味わわせてもらえます。

今や私たちにとって、イエスが復活して栄光を受けた、この一つだけで十分です。復活したイエスは、まだ自分の信仰に自信の持てない人でも、素晴らしい結果に結びつける力を帯びてともにいてくださるので、す。 「はっきり言う。カトリックの信仰が十字架を重くしている」そう食ってかかる人もいるのかもしれませんが。その人にも復活したイエスはともにいて、最後まで十字架を担う力を与えてくださいます。

復活したイエスにすべてが委ねられているので、私たちはどんな状態にあっても良いものに変えてもらえます。ですから復活したイエスは、御父が人類に与えることのできる答えであり、すべてなのです。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)